

Title	経済史四十年
Sub Title	Forty years as an economic historian
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1971
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.64, No.8 (1971. 8) ,p.517(3)- 529(15)
JaLC DOI	10.14991/001.19710801-0003
Abstract	
Notes	高村象平教授退任記念特集号
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19710801-0003">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19710801-0003</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の研究会であった。それだけに、先生の指導も綿密で、きびしくもあった。私はこの先生のもとで、ドイツ経済史を専攻した。その動機がまた極めて非学問的で、ドイツ語を使ってみようということであった。当時、学生の間では、第2外国語のドイツ語やフランス語の書物を読むことが、畏敬(?)の目を以て見られていた。それで私も、それをやってみようと思い、そのためにドイツ経済史を選んだのである。

私たちのクラスは、先生の研究会の2回目の卒業生である。野村・高村合同研究会の時代から数えれば、4回目ということであるが、いずれにせよ、高村門下の「高弟」であることに変わりはない。先生もまだ若かったし、私より上級生は、先生との年齢差は更に少なかったわけだ。「ナーニ、高村さんには教わったというより、共に学び、共に遊んだ仲さ」と、ある上級の先輩が、一ぱい機嫌で言ったことがあるが、実際、そんな感じだったのかもしれない。しかし、私どものクラスからは、「共に遊ぶ」どころか、教えを受けた「コワイ先生」という印象のほうが強い。してみると、この間のわずか一兩年の間に、高村先生の領主的権威は、完全に確立されたということであろうか。

先生は昭和36年、野村先生の逝去と相前後して、塾長に就任された。これはわれわれにとって、全くの驚きであった。高村先生と塾長とは、どうしても結びつけて考えることができなかった。山梨県に住む先輩の元研究会員が、新聞でこの報道を見て、どうしても信じられず、「新聞にも誤りはあるから」と、わざわざ汽車賃を払って上京し、塾監局にいて問い合わせ、はじめて納得したという、笑い話さえ生まれた。先生はもとより一介の学究ではない。多方面の才能の持主であり、特にその事務的手腕の抜群であることは、「社会経済史学会」の運営を通じて、われわれもよく知っていた。それなのに、先生が塾長になるなどとは、一度も考えたことがなかった。それは、おそらく、われわれにとって、先生が余りに身近な存在であったために、塾長という特殊の地位と、結びつけて考えることができなかったからであろう。

ともあれ、先生はよく塾長の重任を完うされ、それを境に、一段とスケールの大きな存在とられた。教育界の大立物として、広く社会に活躍されるようになった。それはわれわれ弟子どもにとって、まことに嬉しいことである。けれども、われわれの心に浮かぶ先生の映像は、常に塾長以前のそれであり、戦前、大仏裏のお宅で、いつうかがっても、勉強しておられたあの時代、戦後、荒廃した三田の研究室で、苦楽を共にしたあの時代の先生のお姿である。先生の御健康と、今後の御活躍を祈ってやまない。

(服部時計店副社長)

## 経 済 史 四 十 年

高 村 象 平

島崎教授や中鉢学部長から過分な紹介のおことばをいただきました。何かおしりのほうがむずむずする感じであります。

けさ、三田の図書館の前の石段を上がってまいりまして、ちょうど朝陽がさしておりましたが、感慨無量なものを味わいました。

数えてみますと、私は旧制の大学出身でございますから予科3年本科3年というわけで、その頃は日吉のキャンパスはなく、全部この三田の山の上で過ごしたのですが、それが6年間。続いて昭和4年の春から本年に至りますまでの教師としての42年間。合わせて48年というものをあの石段を上がったり降りたりしたのでありますが、これでもう頻繁に上がらないで済むようになるのかと思いますと、ちょっと妙な感じがいたしまして、涙もろければ泣くところでございましょうが、いまどきそういうのはやりませんようです。その他方におきまして、せいせいした気持ちもちょっとあるのは、困ったものでございます。

そこで、きょうは何をお話ししようか。当初島崎教授や中村教授から私の最終講演についてのお話を承りましたときは、即座に考えましたのが、「経済史四十年」という題でもお話ししようかと申し上げたのでございました。それは、過去40年間における学問上の問題を中心にして、それに私の研究歴を織りまぜてお話ししたらいいのじゃないかと思ったからであります。その後だんだん考えている間にそれでは少々てまえみそが多くなり過ぎるんじゃないか。一体、手柄話というものはお聞きになる方にとってはいやなものであります。しゃべっている当人はいい気持ちになっているんですが、これほどいやらしいものはない。慶応義塾を去るに当たりまして、いやらしい男だったと思われたくない。

そこで、ちょうど私がこの大学に入るようになりましてころといってもいいし、あるいは、実際に研究者としてあれこれ首をつっこむようになりましてころといってもいいのでありますが、約40年この方のわが国における経済史の研究、特に私のやっております西洋経済史でございますが、その西洋経済史関係の研究の動向といったものをかいつまんでお話しし、それに将来はどうあってほしいかという私の感じておりますことを付け加えまして、若い方々に何らか御参考にもなればと、

こう考えた次第でございます。

ただ、これにいたしましても、歴史はある時点から急に始まるものではございません。経済史と申します経済学の一分派でもあり同時に歴史学の一分派でもありますものが、現在ありますような専門的な学問になったところの話から始めることになりましたが、その中に慶応義塾とかなりゆかりの深い事柄があるということを織りまぜて申し上げたいと思っております。

わが国での経済史の研究は、ヨーロッパに始まったものの翻訳紹介から入ってきておりますが、そのヨーロッパにおきまして、経済学並びに歴史学の一分派としての経済史という学問が成立いたしましたのは、一体いつごろか。ほぼ百年前であります。大体1870年代といったらよろしかろうと思います。ただ、人によりましては、その成立の起源をどこに置くかで時点が違います。たとえば、大学の講義題目に経済史という名称が掲げられたとき、それはハイデルベルク大学においてであります。それが1853年、担当者はキーゼルバッハ講師であります。この最初の使用を問題視する人もあります。但しこのとき講義はしなかったということであります。それから、経済史という表題の専門的著書が刊行されたときをとりあげる考え方もございます。それですと、「ドイツ経済史」という書名の第1巻がカール・テオドル・フォン・イナマ＝ステルネックによって出されたのが1879年でありますから、ちょうどいまから百年近くになるわけであります。

さて、キーゼルバッハの1853年ならばわが国の嘉永6年、イナマの1879年ならば明治12年に当りますが、この幕末から明治初年にかけての時期に、外国製の経済史という学問が入ってまいります場合には全部翻訳であることはいうまでもありません。それも、いわゆる文明開化の時勢下においては一流の文明国についての関心が多かったわけでありますから、文明史とか万国史とかいう表題で、しかも出版するに手ごろな通俗書が翻訳され刊行されたのであります。これに続いて経済史的なものとしては、先進国の貿易関係に興味が寄せられる。オランダのキーヒッツの「交易通史」の刊行が明治5年、レヴィの「大英商業史」の翻訳が明治12年、これは元老院出版であります。

これらの万国史風の、さらに産業上において先進国であったイギリスの歴史の翻訳から離れて、西洋経済史という学問が成立するためには、まず西洋史学の方法論をとり入れることが必要であります。この考えが出てまいりますのが明治19年のことであります。それは東京帝国大学、現在の東大であります。この東大にドイツのルードウィヒ・リースが招かれて、史学科が創設されました。リースはレオポルド・フォン・ランゲのお弟子さんでありまして、史実に忠実な客観的研究方法をわが国の史学界に導入しまして、実証的な個別研究を進めて在来の通史を書き改める下地をつくりあげたのであります。リースと並んで教鞭をとったのが、ドイツ留学から帰国した坪井九馬三先生、ランゲの傾倒者であります。この2人によって学問らしい形のものでき上がっていったと見てよろしかろうと思います。但し、しばらくの間は、ランゲあるいは同じくドイツのベルンハイムといったドイツ史学の方法論がそのまま受け入れられていたものであります。これを日本的な

のにしてゆこうという気運が醸成されたのが明治32年。東大に日本経済史の講義、わが国の大学における経済史の最初の講義がおこなわれました。内田銀蔵博士によってでございます。内田博士は歴史派経済学を学び、わが国に経済史学を樹立することに努めた先覚者であります。

その翌年の明治33年に、ドイツで日本人が歴史学派の方法論を適用して、日本経済史をドイツ語で発表いたしました。ルーヨ・ブレンターノについて学んでいた福田徳三先生であります。この本は、その後明治40年になりまして、お弟子さんの坂西由蔵博士が日本語に翻訳されてから、わが国で喧伝されるようになった。

この福田先生は、皆さん御承知かもしれませんが、高橋誠一郎先生とよく論戦をまじえられた方でございますし、高橋先生や小泉信三先生を育てた先生といってもいいと思うのであります。慶応義塾でしばらく教鞭をとっておられました。福田先生のお考えは、人間の生き方はほぼ同じようなものだ、たとえば、洋服を着るなり和服を着るなりの違いはあっても、人間は同じような動き方をするものだ、同じ社会経済的条件は類似の制度をつくりだすという考えでありまして、したがって、日本の経済発展はヨーロッパの経済史の径路と一致しているという前提のもとに書かれている。ですから、いわばお手本があるものですから、非常にわかりのいいものにはなっているわけでございます。

そのようなことで明治時代が終って大正期に入りますと、慶応義塾の先生が登場されます。それは私が大学在学中に講義を伺った滝本誠一博士。この滝本先生が大正3年から6年にかけて「日本経済叢書」という36冊のものを編集されました。これは後に「日本経済大典」と改題し、内容も充実して54冊のものになっており、最近では復刻が出ているようでございます。わが国の経済史を研究する上において極めて重宝なものを作ってくださいました。この史料集と並んで、竹越与三郎氏によりまして、大正8年から9年に「日本経済史」と題します8冊の研究書が出ました。

このころは、言うまでもなく第一次大戦の終わった、あるいは終わろうとする時期でございます。日本の学界全体におきまして、唯物史観の研究が本格的に始まろうという時期でございましたし、また、資本主義社会がどのように発達してきているのか、それを理論ばかりでなく実証的にも研究してゆこうという気運が強まった時期でもあったのであります。その場合に経済史関係で注目すべきことは、先ほど申しましたランゲ、リース流の考えでないし研究の仕方は、ともすれば政治史の方向に流れてゆきやすい。ところが、歴史は決して政治面ばかりじゃない、もっと別の面も十分取り入れて考察したほうが一層真相に近づくのではないかという考え方が強く出てまいりました。

と申しますのは、精神史も必要であろう、物質的な経済の面についても十分配慮しなければならぬという考え方でございまして、これが、いわゆる文化史という形で経済史を見てゆくことになるのであります。大正11年に現在の一橋大学、当時の東京商科大学の三浦周行博士によって「文化史とは何ぞや」という論文が発表されましたし、加えてほぼそのころに、私の師匠であります野村

兼太郎博士がドイツ西南学派の哲学を取り入れまして、経済史は経済的価値に関係ある事実を取り入れるが、価値判断を下すものではないということを力説されました。これが、「経済的文化と哲学」と題します大正9年の著書、または、大正8年から10年にかけて三田学会雑誌に発表されたいくつかの論文で主張されたのでございます。

私は野村先生には大正末年から昭和の初年にかけての本科の3年間にいじめていただきました。そのときは、ずいぶんやかましい先生だなと思いました。と申しますのは、少々これからまえみそになりますが、先ほどもちょっと島崎教授の御紹介の中にもありましたように、私の大学の卒業論文の題目は、「クライミング・ボーイ」(よじ登る子供)です。煙突の中をはい上ってゆく子供、つまり、自分のからだで煙突の内部をこすってすすを落としてゆく、自分がいわばブラシになってゆく、そういう悲惨な子供の生活を研究テーマにしたのであります。

その動機を申しますと、これは、つくづく偶然というものはおそろしいという感じがするのであります。話はもっと前にさかのぼります。大正の初期のことです。私が中学に入りましたとき、非常にやかましい英語の先生に教えを受けました。1年のときから、フェアリー・テールズでも何でもいいから自分でさがしてお読みなさいといわれる先生でございました。2年のときも持ち上がりでその先生に習ったのですが、「君たち、丸善という本屋があるが、その2階へ行くと洋書が並んでいるから、その中でやさしそうなものを選んで、ひと夏かかってその半分でもいい、三分の一でもいいから、読んだ感想文を書いてお出しなさい」といわれたのであります。

その時分、丸善なんか初めて恐る恐る行ったのだったと記憶しますが、結局、お小遣の関係もございすし、なにしろ中学2年生ですから、何をさがしたかとお申しますと、チャールズ・ラムの「シェークスピア物語」。それを、一番安いエブリマンズ・ライブラリーで、たしか1円30銭くらいだったでしょうが、それを買って、そのうち幾つ読みましたか。坪内さんの翻訳などで知っておりました「ヴェニスの商人」だとか、あるいは「マクベス」だとか、とにかく二つか三つ読みまして、それを夏休みの宿題として出した。ですから、いわば子供心にチャールズ・ラムというイギリス人の名前がどこかに残っていたわけでございます。

大学へ入りましたところ、夏目漱石全集が岩波書店からたしか1冊4円50銭で出ました。これを苦労して買いました。親から金はもらったはずなのですが足りませんで、毎月だったか隔月だったかの払込みに苦労しました。ついに、この山の下に古くからの質屋がありますが、あそこへ前の配本を持って行って借りた金を次の払込みに当てる、一種の自転車営業です。これは、私自身の知恵ではないので、いま幼稚園がございす天現寺に塾の寄宿舍がありました。ここに私が予科在学中の3年間入っておりましたときに、先輩から教えてもらった知恵であります。生まれて初めて質屋というところへ通いました。しかも、奇妙なことに自分の居住している近所の質屋へは行かないで、遠いところの質屋へ行く。これは一つの原理のようです。そういうことで漱石全集をあれこれと読

み散らしていたのですが、そのうちの第何回目の配本かは忘れましたが、文学論でしたか文学評論でしたかを読んでおりました。

そこにチャールズ・ラムの「ジ・エッセー・オブ・エリア」の筋書が出ている。その一つに、文章ははっきり覚えておりませんが、記憶に残っておりますことは、ある冬の寒い朝、窓の外にスズメの声が聞こえる。顔を出してみると、雪が積もっていて、そのまっ白な雪の上を黒い小さなものが動いてゆく。そして、「スィープ、スィープ(お払い、お払いはいかが)」と言っているのが、ピープ、ピープとまるでスズメの声のように聞こえる。それはまっ黒けな煙突掃除の子供がすすを入れる袋をかついで、白い雪道を歩いてゆくの、何かまざまざ絵画を見るような感じがしたのであります。それに、私自身多少文学趣味もございましたし、また予科時代は素人芝居をやっていた人間でございすために、この情景にひかれまして、さっそく何叢書でしたか、ジ・エッセー・オブ・エリアという本を求めまして、その中の「プレイズ・オブ・ザ・チムニー=スウィーパー」、煙突掃除夫の讃と申しますか、それを読みまして。

その中にはそういう情景が出ているばかりでなく、それらの子供が親方によって実にひどい扱いを受けていることが書いてあるのです。時はちょうど18世紀の終わりから19世紀の始め、いとけない子供を酷使しまして金もうけをやったという物語であります。たまたま、そのころ私は卒業論文を書かなければならないことになったのであります。これがいいやと思いました。

そこで、私の師事すべき野村兼太郎先生に、「煙突掃除の子供の研究をしてみたいので、しるべき参考書を御指示いただきたい」と申しますと、「君、ほんとうにやるのか」と言われましたのをまだ覚えております。あだや冗談で来たのじゃありませんと腹の中では思ったのですが、そういうわけにもいきませんし、「はい」と、しとやかに返事しますと、「君、これこれの本を読みたまえ、図書館にある筈だから。」と最初に指示されたのが、ヘンリー・メイヒューという人の「ロンドン・レーバー・アンド・ロンドン・プープ」(ロンドンの労働者とロンドンの貧民)という4冊ものでございます。これを借り出して驚きました。こまかい活字で二段組みになって、塾の図書館にありますのは、いまでもそうだろうと思いますが、最初の目次の箇所がない。ですから、一頁一頁みんな見ていかない限りどこに何が書いてあるのかわからない。意地の悪い本です、あれは。ただ、都合のいいことは、挿絵がありまして、子供が仲間とランプの下で食事をしているものや屋台店で果物を売っているところ、その他いろいろな挿絵が入っておりますので、まあこの辺だろうと見当がつく。煙突掃除は、たしか第2巻の終りの方、三百何ページから四百何ページにかけてであったと記憶しますが、ここに行き着くまでにはずいぶん時間がかかりました。

しかし、ありがたいことに英文をはすに読む術を覚えました。まともに読んでいたらやりきれないので、パラグラフの最初の2、3行を読んで、それから最後の2、3行を読む。その間に納得するところがあればそれですましてしまう。両方の間に何か突っかかるものがあれば、そのパラグラ



フを読み直すという形で、さもないと進みがおそくなるものですからこういうことをやったのであります。

その後、ヨーロッパへ留学いたしましたときにグラスゴーでありましたか、古本屋でその4冊ものを見つけました。いまだに所持しておりますが、これにはちゃんと目次がついております。こういうのがあればいいなあと思ったのですが、野村先生は私をテストするためにその意地の悪い本を読めとおっしゃったのかもしれないのですが、とにかくそういうばかばかしい苦勞でございますが、思い出になります。

私の「クライミング・ボーイの研究」は、メイヒューの本だけでは足りませんで、まだ何種類か参考書を先生から指示されました。チャールズ・ブースのロンドンの労働者の研究、これは9冊ものでございましたが、これも読みました。というよりは、眺めましたという方が正確かもしれません。結局この卒業論文がきっかけになりまして、経済学部の手助に採用されましたのち、しばらくの間はイギリスの産業革命時代の児童労働を研究テーマとしました。ただ、木綿工場その他で使われている児童につきましては、皆さん御承知だろうと思いますが、マルクスの資本論の第1巻第8章にかなりくわしく記述がございますのでこれは省きまして、炭硯や農場で働く児童、その供給源たる教区徒弟などについて2年あまりやりました。

ところが、何を書きましても師匠の野村博士はいいとは決して言うてくださらない。と申しますのは、野村先生はドイツ西南学派の哲学を取り入れられた経済史研究の第一人者といってよろしいのでありますが、ケンブリッジ大学でウィリアム・アシュリー先生を指導教授とし、クラップム先生をチューターとして3年間留学され、帰国して間もなくのころに私が弟子入りをしたということでございます。先生は英語は非常にお得意でございますで、試験問題も英語でおっしゃる。それを書き取りましたわれわれは、英語で答案を書く。ですから、問題を聞きそなたら全然違ったことを書いてしまうことになるんです。それから、行儀作法にやかましい方でして、教室で何かの拍子にしいんとしているときに却って何かをしたくなる衝動にかられることがあるものですが、そのとき鉛筆でも削ろうものならその削る音だけがえらく響く。そうすると、先生は大きな目をギョロリとして「鉛筆は家で削ってくるものだ」と叱られる。そうかと思うと、物音一つしない静かなときに、ひょっと気がつく、と、にらまれている。私は新聞を読んでいて叱られたことがあります。

学生時代には前の人の背に新聞を立てかけて読んでいれば見つかるはずはないと思ったのですが、その後、教壇へあがるようになりまして、上から見ますとよくわかりますね。ここにいらっしゃる学生諸君は、今後教室でお読みになるときはもっと別な手を考えなければいけませんよ。学生諸君が教室でなさることは、私の大正末期から昭和初年にかけてのころの行動と、現在と、ほとんど違わないようであります。カンペーのつくり方だってみんな似たようなものでしょう。そういう点では進歩はゼロのようであります。

それはさておきまして、この大正末期から昭和初期にかけまして、先ほども触れましたように、唯物史観の研究がわが国におきまして本格的に始まってまいります。これには福田徳三博士、河上肇博士、柳田民蔵氏、慶応義塾の小泉信三先生等々が中心で、そういう方々の唯物史観の解釈や批判についての論争が当時の総合雑誌でありました中央公論や改造を毎号飾っておりました。その場合に、経済史関係で申しますと、いわゆる資本主義論争なりあるいは封建論争という名称で呼ばれておりますものが展開されたのであります。

この封建論争なり資本主義論争なりを一口で申しますと、史料をマルクスの理論にあてはめようとする企てが一方にあり、他方には、史料によってそれを批判しようとする動きがある。この両者の論争が展開されたのでありますが、これと並んで、もう一つ経済史研究における極めて大きな動きが現われてまいります。それは明治初年以來ずっと続けられて明治の45年間、大正の15年間、合わせて60年間も続いてきた翻訳あるいは外国の業績の紹介から、離脱する動きであります。

これは、わが国の学界における先覚者が立ち上がって自分の足で歩いてゆこうとする気がまえばはっきり具体化したということであります。しかも、その先鞭をつけられ、宣言を発表されたのは、私の師匠である野村兼太郎博士であったのであります。先生の離脱宣言が著書の中に明示されたのは、ちょっとおくれまして、「一般経済史概論」という本をお出しになった昭和15年のことであります。その序文にこういうことが書いてあります。これは、いまだにわれわれが取り上げていいことばのように思いますし、また、私もつとめてその方法をとるようにしてきているのでございますが、こういうことでございます。「欧米の経済史家の手になる一般経済史が、概して世界のある一部にすぎないヨーロッパに起こった事実を、あたかも全人類の発展史のごとき形態で表現していることは、彼らとしては当然のことかもしれないが、われわれアジア人の書くものもそれと同じであっていいものかどうか」と。この疑問の投げかけであります。

たとえば、どうかするとイギリスのマナー制度が、人類の経済発展の中世的典型として、すべてをおおい尽くしているような叙述を見る。しかしマナー制度は、あの狭い島の一部のイングランドで少数の人間によって営まれたものにすぎない。ただ、後にイギリスが発展して大帝国になり、世界に覇を唱えることができたために重要視されているにすぎない。そのほかヨーロッパ人、特に西欧人の経済生活のみが人類の経済史を構成すると考えることは、少なくともアジア人たるわれわれが経済史を書く場合には、これを疑問としてもよいであろう。これは、一般的な概説においても、従来の翻訳紹介の域を離れなければならないという学問的な宣言であると思います。これを慶応義塾の先生が唱えられたということは、われわれとして大いに肩をそびやかしていいことのように考えるのであります。

もちろん、この宣言の実現は、野村先生独りの力でなしとげられるものではございません。幾つかの全国的な経済史に関する学会が昭和初年にでき上がってまいります。第1には、京都に経済史

研究会が設立されまして、そこから「経済史研究」という機関誌が昭和4年11月から発行されます。この研究会が後に日本経済史研究所に発展しました。また、塾の野村先生、一橋大学の猪谷善一先生、当時明治大学におられました滝川政次郎先生の3人が発起人となりまして、社会経済史学会という全国的な学会を創立し、昭和5年12月に早稲田大学で発会式を持つようになりました。翌6年の5月から「社会経済史学」という機関誌が出ます。

日本経済史研究所や社会経済史学会は、会員の年かっこうから言えばわが国の学界の中堅以上の方々のグループであります。そこで、若い方々、このごろのことばで言えば造反的な若い歴史家は、また団体をつくります。これが歴史学研究会、昭和7年12月に創立されまして翌年11月から「歴史学研究」という機関誌が出ます。

そういう全国的な学会ができますとともに、従来諸大学にごさいましたいろいろの歴史学研究のグループを発展解消させるたてまえになっていたのですが、何と申しまして学会機関誌はせいぜい月に1回しか出ないという実情では、研究業績を発表する機会はそうそう回ってまいりません。そこで、それぞれの大学におきまして、経済史学会ができるようになる。慶応義塾におきまして慶応義塾経済史学会が野村先生を会長としましてつくられ、その機関誌として昭和12年以降「歴史と生活」という雑誌がその後7年間出るようになるのであります。

このような経過で全国的な学会がわが国にできあがりました。これは昭和4年以来のことですが、たまたまその年に私が研究者として勉強を始めるようになりましたので、爾来わが国の経済史学界の動向とかなり密着した研究生活を持つことができましたのは、私自身にとって非常に幸いでありました。最初の年度に遭遇したということには偶然が伴っているに相違ないのでありますが、それだけにかなりむちゃなことでもできたと思います。一つのことを長く続けてやってもしかれることのない、そういう世の中だったということでございます。

先ほどもちょっと触れましたように、私は昭和4年に大学を卒業いたしましたから約2年間はイギリスの研究をいたしましたが、その後1年間は歴史哲学の研究をしました。そのあとは昭和8年の1月に論文を発表いたしましたから、現在に至りますまでの間、八百年も前に結成されましたドイツ・ハンザの研究を一途にやっているのであります。

先般、ある新聞の記者がうちへ参りまして、「よくまあ、——昭和8年という、その新聞記者がまだ生まれてないときなのですが——昭和8年から昭和46年まで一つことをやっていたね」と。「よく言うじゃないか、ほかの一つ覚えと、それなんだよ」と笑って返事しましたが、実際そういうことなので、もちろんその間におきまして、少しは日本のこと、織豊時代の対外交渉のこと、あるいは明治以降の林業史、さらにはアメリカ経済史の一部などもつついてみましたが、結局何と申しますか、自分の住みなれた場所は居心地がよい。それが長らく40年近くも一つのテーマをあきもせずやっているということになると思うのであります。

それでは30数年やっていることで何か結論をつかんでいるのかと申しますと、何もつかまえていないといったほうが正直な答えであります。何か得ようとして研究した場合には、どうもいいものをつかめないように思うのです。なすにまかせておいたら独りでに何かなるんじゃないか。あるいは、私の研究から人が何かをつかんでくれるのじゃないか。そんな気持ちが強く働いております。どちらかと申しますれば、私の研究の際の態度は道楽三昧といわれるようなものでありましょう。

これも、野村先生に懇々と言われたことなのですが、「君、ほんとうにやるつもりならば、人が何と言おうとそれを貫いていかなきゃだめだぜ」。こういわれるのであります。あれこれとあげつらわれても、それらは馬耳東風と受け流して、一つことを続けていって、それから目を離すなどということであったと思います。まあ、一口に言う道楽。その道楽を許してくださった先生、そしてこの慶応義塾という学校は、実に私にとってはありがたい先生であり、学校であったのであります。

もちろん、38年も同じことをやっていたら、何か結論らしいものはひとりでも出てまいります。それはないことはございせん。ドイツ・ハンザは大体12世紀の半ばから約五百年間存続しております。その五百年も続いたのはどうしてであったかについていえば、それは強制がなかったからだと思ひます。ハンザという団体へ加入しようと脱退しようと、出入りについてはすべて制約するところがなかった。それがハンザも末期になりますと、仲間を強制的にある方針に従わせようという動きをとります。そうしますとハンザは崩れていくのであります。これから推しまして、団体なり個人なりが自由意思で集まって仕事をしていく限りにおいては長く続くだろう。しかし、何らかの強制を加えることがあったならば、短い時間しか続かない、長続きはしないものである。これが私の38年のハンザ研究の結論かもしれません。

非常に迂遠な話であります。ハンザの古文書集11冊、ハンザ会議の議事録25冊、ハンザ史学会の年報が88冊、これらをいじくりながらこういった結論に達したということでありす。実際のところ、むなしいものしかつかめなかったかもしれません。だが、それでいいのだと思うのです。

とにかく一つ問題をずっと長くやってきております。私がドイツ留学から帰国いたしましたのが昭和12年でございすが、それ以来自分としても筋の通った仕事をいたしましたし、また、私とはぼ年かっこうの似ております仲間が、西洋経済史の研究業績を発表するようになりますのが、やはり昭和12年以降でございす。野村先生のイギリス経済史研究をまとめられた「英国資本主義の成立過程」が刊行されましたのが昭和12年。東大の大塚君の「欧州経済史序説」や、関西大学の矢口孝次郎氏の「英国社会経済史」が出ましたのも同じく昭和12年。翌13年には大塚君の「株式会社発生史論」が出ました。それから、一橋大学の上原専禄先生の「独逸中世史研究」や、早稲田大学の小松君の「中世英国農村」が出ましたのが昭和17年、翌18年には一橋大学の増田四郎君の「独逸中世史の研究、続いて19年には小松君の「封建英国とその崩壊過程」という具合に、相ついで出るのでありますが、戦時中にはちょっとひどいことがございしました。当時私は「社会経済史学」の編集に

関係しておりましたが、情報局というお目付がございまして、これが新聞雑誌をはじめ印刷物を検閲する。たまたま、私の担当だったと記憶しますが、アメリカ経済史特集を編集しました。敵アメリカの研究をしなければいけないという趣旨だったのですが、その中にアメリカ初期の経済政策という論文があった。これは表題でございまして。情報局の情報官は中味を読みはしないのです。表題だけですべてをきめてしまう。そのときいわれましたことは、アメリカの研究はよろしいが古い植民地時代の研究は不用だということです。経済政策も最近の経済政策なら大いに研究発表すべきだが、建国初期の経済政策とは何事だと、こういうのです。用紙の割り当てを減らすぞといわれるとこわいですからね、紙がなかったら雑誌が出ませんから、閉口いたしまして始末書を入れさせられたと記憶します。

戦後になりまして、GHQというアメリカのお目付が来ましたときにも、三田学会雑誌の編集でかなり苦勞もございました。中鉢学部長もGHQに、私のかわりに何回か行ってくださったことがあるのです。

余談にわたりましたが、とにかく、そういうような情勢のもとで、本格的な研究発表機関であります専門雑誌は、昭和19年の6月から12月にかけてわが国の学界から消えてしまいます。つまり終戦約1年前になくなってしまいますのであります。

さて、これから戦後の問題にはいりますが、戦後にどのような研究がされているかはここで私があげつらうことはない。皆さまのほうがよく御承知だろうと思います。ただ、戦後の特徴としていえることは、いままでマルクス主義的な研究とそうでない研究とが、どちらかと申しますれば背を向けていた形でありましたのが、互いに手を握るようになってきたことであります。両方の間に交流が始まってくる。反省して同じ場に立って問題を深く掘り下げる動きが生れる。いわば、前向きと申しましょうか、建設的な傾向と申しますか、それが始まってきたということでもあります。

でありますから、理論家のほうでも史実を十分尊重する。ただしそうだからといって、歴史的史実を扱っている者がオールマイティかというとは必ずしもそうはいえない。これは皆さまもすぐおわかりと思いますが、歴史事実を取り上げます場合には、必ずそこに何か問題意識がある。さもなければむだなこと、単なる悪戯にすぎない。いわゆる史料主義者は、歴史事実第一に徹し通そうとして、結局何をいっているのか、われわれに何を語りかけようとするのかわからないものがあるのですが、このような実証史学は実は亜流なのであります。これは漸次なくなってゆくように思いますが、このことの反省のきっかけを作りましたのが、これまた慶応義塾なのであります。

歴史的な事実のなかには、全国的な事実もありますし、地方的な、地域的な事実もあり、この後者が集大成されて全国的な動きになる場合もあります。したがって、いわゆる地方史の研究は非常に大切なものになります。戦後の地方史の研究につきましては、野村兼太郎先生を会長といたします近世庶民史料調査委員会が、慶応義塾を本部として昭和23年から28年にかけて活動しました。

全国的に手を伸ばしまして、旧家に保存されている史料の所在調査をやりました。その結果が、「近世庶民史料所在目録」3冊であります。

最初、印刷に付しましたときには、こんなものは売れないだろうと思ったのです。著名な研究者には無料であげてしまっているのです、そのあと購入する人はいないだろうと思っていますと、これが売切れてしまうのです。どうしてかといいますと、古本屋が買ってしまうのです。古本屋はこれを種本にしまして、どこどこ何々家にはこれこれのものと、買いにゆく。結局、なんのことはない、古本屋の手伝をやったような形になってしまった。全く商売上手な連中は目の付けどころが違う、学問をやっている者は迂遠なものだと、つくづく感じさせられた次第でございます。

それから文部省の史料館が品川の戸越にございまして、あの設置には野村先生が随分尽力されました。また昭和25年には地方史研究協議会が設立され、初代の会長は野村先生であります。翌26年から「地方史研究」という機関誌を出しまして現在も続いております。これらの意味するところは、従来地方史あるいは郷土史の研究というのは、好事家のひまつぶしといった形のものが多かったのでありますが、そうではなくして、地方史研究は経済史の研究をおし進める上に欠くことのできないものであるということをはっきりさせたということでもあります。

したがって、これらの庶民史料や地方史の研究に基づいた経済史の研究にはいままでになかったものはいってまいります。従来はどちらかと申しますと、経済制度、あるいは経済組織についての研究に重点が置かれていたのでありますが、こんどは経済生活の歴史が主流を占めるようになった。それも、貴族であるとか、領主であるとかの生活ではなくして、庶民の日常生活行動を解明する。当時の人々にとっては何でもなかったことが、現在ではわけがわからなくなっている。それらをとらえることによって、時代の移りかわりをヴィヴィッドにさせてゆく。いわば、生きた経済史と申しましょうか、血の通った経済史と申しましょうか、これが必要だということを多くの人を感じるようになってきた。これは非常に重要なことであると思います。

しかもこの動向はわが国だけの現象ではありません。最近、イギリスにおきましても、ドイツにおきましても、地方史研究が盛んになっておりまして、たとえばある一つの村落の研究が決してその村落の歴史だけのものではない。その村落のような組織を持ったこの社会にも通用する一般史をその中に含んでいるのだと、いえるような研究が、陸続と出るようになっているのであります。

それだけに、今度は日本で外国の研究をする場合にたいへんなことになります。外国の地方史学会の機関誌、研究叢書、そういったものを買い集める。イギリスに多数の地方史学会の機関誌がありますが、それらをもっとも多く備えているのは日本でありましょう。それは、何も一ヶ所にあるとは限りません。慶応義塾にもあるだろうし、早稲田大学にもある、東大にもあるし、一橋大学にもあるし、立教大学にもある、等々を合せた場合であります。ちょっと聞いたことがあります、イギリスのある地方史学会で、何で日本からこんなものの注文が来るんだろうと不思議がったほど、



今までストックになっていたものを倉庫から引っ張り出して売ったといひます。恐らくそういうことが現在でも続いていると思いますが、これは気をつけませんと、いつでも向こうの人の仕事のあとを追いかけるということになるのです。ただ、明治大正期の翻訳紹介の仕方と、現在とではとりあげ方が違っているように思ひますので、その点ではまず安心してよろしかろうと思ひます。ただ、その場合、研究者が自主的な態度をとってくれないと、向こうの垢をなめるということになりかねない惧れを蔵しているのであります。

さて、時間もかなりたちましたので、そろそろ私の話をまとめることにいたしましょう。それを最近の研究動向を中心として申しあげましょう。

まず最近の動向の一つは、ある時代と次の時代との中間にある過渡期の研究が相当おこなわれているということでありまふ。しかし、これは最近の動向としては、ちょっと下火になってきているといえるかもしれません。具体的な例をあげますと、岩波書店から「西洋経済史講座」という5冊ものが出ております。あれの副題に「封建制から資本主義への移行」とあります。つまり、いわゆる中世から近代への移りかわりの時期が、近代資本主義を理解する上に一番大切だという見解から、大塚久雄君を中心としたグループが編さんしているのでありますが、これが第1。

ところで、この近代資本主義が確立いたします場合の一つのエポック、つまり、歴史的な画期といたしまして、産業革命があつたということは、皆さん御存知のことと思ひます。すなわちいま申しました封建性から資本主義への移行、その最終段階が産業革命であります。この最終段階をはっきりとらえることによりまして、近代資本主義の歴史的な性格を浮き彫りしていこう、確認しようという動きが、第2にあると思ひます、5、6年前に出ました高橋幸八郎君の編さんしました「産業革命の研究」などに、これは端的に出ているようであります。

第3に注意をひきますことは、国際的な経済史学界の一般的動向をとり上げてゆくものであります。これも、へたをすると外国の学者の業績の真似になりかねないのでありますが、まあ、心配するほどのことはありますまい。現在問題になりますのは経済成長に関するもので、経済成長の要因としての工業化の過程、それと並んで経済停滞の問題、これも成長理論と結び合わせて考えてゆくのでありまして、数量的な実証分析を積み重ねてゆくのであります。さらには人口統計学的方法を歴史に適用してゆく。ある時期の経済的衰退または停滞の原因を、人口減少という人口学的要因によって数量的に実証できると考えるのであります。この第3の動向を生んだ契機の一つは国際経済史会議でありましょう。1960年、ちょうど10年ばかり前から3、4年ごとに国際経済史会議が開催されておりますが、その際の共通論題からヒントを得るのであります。1960年にストックホルムで開かれました第1回の国際経済史会議の共通論題は、1700年以降の経済成長の要因としての工業化でございました。

最後に、これは今後の問題であつて、すでに緒についているとは必ずしもいえないのであります

が、先ほど披露いたしました野村先生の「一般経済史概論」の序論にあります「外国人の見方から離脱せよ」という宣言であります。これを実行してゆかなければいけないのですが、これを自覚している若い研究者が出はじめているのであります。われわれアジアないし東洋に住んでおります者は、何と申しましてヨーロッパ人と感覚におきまして、メンタリティーにおきまして、もの見方におきまして、違いがございます。この相違をもっと重んじ打ち出してゆかなければならない。この行き方は、たとえば、今日の問題は、今日の世界事情の中からつかみ出してゆけということになるのであります。最近の世界史の現実としまして、一方、アメリカとソ連とが非常に発達を遂げております。その他方におきまして、アジア、アラビア、アフリカで、いわゆる後進的な諸民族の勃興という事態がございます。この現実に立脚して新しい世界史像をつくり上げてゆく。これは日本人ないしアジア人の立場において、自主的に新しく形成していかなければならない。

このような立場を意識した研究におきましては、いままでの研究方法をそのまま踏襲していかどうかの問題がございます。気をつけないと、結局外国人のやつたものをそのまま追いかけることになりかねないという難点がある。それから、研究上に使います概念には、わかっているような、しかし、実際ほんとうにわかっているのかどうかははっきりしないで使っている概念があります。たとえば、近代化とか、封建制とかいうようなことばであります。何かわかっているような気がする。しかし、うちのおやじは封建的だといったような言い方でなくて、学問的に使います場合には十分に吟味した上で使わなければいけない。それから、いろいろな経済学概念や法則を使いますが、適用することによって歴史的な事実を押しつぶしてしまつてはならない。というのは、史実は表面上は非合理的な展開を示すがしばしばあるのですが、それに対して合理的な法則や理論をあてはめて抹殺するようなことがあれば、それはむしろ独断におちいることと同じだからであります。

以上とりあげました最近の研究動向としての4点は、いずれも大きな仕事であります。日本の各地で若い研究者によって着々と実践されているように見受けられます。

したがいまして、いま私が三田の山をおりまして、日本の経済史学界については安心していいし、ここにおられる島崎教授はじめ、中村、速水、琴野教授、渡辺、寺尾、岡田助教授等々の方々の手によって慶応義塾における経済史という専門的学問は立派な業績をあげてゆくに相違ないし、それを私は心から期待してやまないであります。また、ここに集まつておられる塾生諸君は、慶応義塾に学んでよかったという気持ちを抱いて御卒業になっていただきたい。

そのような期待を胸に抱きながらこの山をおりることができる私は非常に幸いです。あれこれとつまらんことも申した感じがありますが、以上をもって、皆さまとお別れいたします。

(名誉教授)